

## 中日韓における『経国美談』

周 艶君 (嘉興学院)

### はじめに

『経国美談』は矢野龍溪がギリシア歴史に基づいて創作した政治小説であり、文学改良意識と改進黨の政治思想が織り込まれた作品である。小説は古代ギリシア勃興期のテーベを描き、日本の民権と国威の伸張を図り、光彩のある主題、雄大な構造、耳目一新させる文体で当時の人々の共鳴をもたらした。齊武の民政の廃除という主題で、民政の快復、国政改革、民心安定、国威振起、国権伸張、邦本固定、世界大平和の大業の達成を描く『経国美談』は、明治文学史に政治小説創作の嚆矢であるということは今までの研究によって既に認められている。作者である矢野龍溪 (1851-1931 年) は、明治時代における立憲政治家、自由民権家であり、報知新聞社や大阪毎日新聞社の最高責任者をつとめた。矢野龍溪の作品は、随筆、小説、遊記、論説など様々なジャンルがあり、内容が政治、文学、思想、経済、外交、文化、教育など様々な分野に触れている。その中で日本で大きな反響を巻き起こしたのは『経国美談』、『浮城物語』と『新社会』である。

『経国美談』に関する研究で、先駆的な役割を果たしたのが柳田泉の「『経国美談』とその政治思想」(『政治小説研究・上』1967) である。柳田泉は『経国美談』の作成背景から小説の梗概、小説が表した作者の政治理想、文学史における意義、当時の流行及び小説界に及ぼした影響まで考察し、論理性且つ総合性のある一作である。また、その後、鈴木英夫の「明治前期文語文の語法―『経国美談』前篇の異同を中心に」(『国語と国文学』1976)、林原純生の「『花柳春話』から『経国美談』へ―近代文学形成期への一視点」(『日本文学』1980) 及び布袋敏博の「二つの朝鮮語訳『経国美談』について」(『近代朝鮮文学における日本との関連様相』1998) さらに近年の寇振鋒の「清末の漢訳小説『経国美談』と戯曲『前本経国美談新戯』-明治政治小説『経国美談』の導入、受容をめぐって」(『名古屋大學中國語學文學論集』2006) などが発表された。本稿は先行研究の整理の上で、東アジア文化交渉に視点を置き、中国、韓国における『経国美談』の受容と訳本を取り上げる。

### 1 『経国美談』の日本における受容

『経国美談』は前後編からなり、前編は1883年(明治16年)3月刊、後編は1884年(明治17年)2月刊である。小説の舞台は紀元前382年頃の希腊北部の民政国家即ちテーベである。『経国美談』は古代ギリシャの歴史をもとに、ペロピダスとエパミノンドスの2人の主人公のテーベ勃興歴史の渦における個人の奮闘史を描写した小説である。前編はテーベの志士が国の

民政を回復するまでを描き、後編はスパルタの侵略を退けてテーベがギリシャの盟主となる過程を描く。翻訳と創作の中間的な作品で、雅俗折衷体の文体が注目された。当時、講談や演劇にも変容され、広く流布した。

『経国美談』を含めて最初の政治小説の創作によって、明治初期の文学界文学史上空前の「政治小説創作ブーム」がもたらされたことは疑いの余地はない。例えば、後に出版された東海散士の『佳人ノ奇遇』（初篇は1885年）、末広鉄腸の『雪中梅』（1886年）、『花間鶯』（1887年）などの例が挙げられる。政変によって下野した政府のもと高官であり、著名なジャーナリストであった矢野龍溪の『経国美談』の出版は、従来「婦女子」の「手なぐさみの道具」と考えられてきた小説を政治とつなげ、戯作と貶められた小説の地位を向上させる<sup>1</sup>。高名な政治家みずからが筆を執った作品というだけでも、当時の人々にとっては新鮮な驚きであり、小説家の社会的地位が『経国美談』の誕生によって向上させられたことがわかる。

『経国美談』は従来戯作とされていた小説が政治と繋がっており、当時の青年志士の唱采を浴び、深い感銘を与え、有名な作者まで広く読まれたのである。青年らが愛好した作家として、徳富蘆花・片山潜・高安月郊・北村透谷・国木田独歩・田山花袋などの名が挙げられる。例えば、徳富蘆花は『思出の記』<sup>2</sup>における有名な一節「それから経国美談の番で、僕らは幾番徹夜してイパミノダスピロピダスとテーベの経営に目を悪くしたかもしれぬ」と『経国美談』の流行の様子を表した。また、当時の『絵入自由新聞』<sup>3</sup>は「前代未聞、東洋開闢以来の傑作」と『経国美談』にこの上のない賛美を与えた。かつ、前述した藪氏は「『経国美談』は開花の人々の心を健康な感覚で刺激し、ありうる新しい世界への期待を呼び起こす質のものたり得ていた」<sup>4</sup>と論じた。

そのあと、『経国美談』の代表的な先行研究である「『経国美談』とその政治理想」（『政治小説研究・上』、1967年）に、柳田泉は

光彩ある主題と、興味深い史実と、雄大な結構と、巧妙な説話と、流麗な文章とに魅惑され、若い血を躍らして書中の青年政治家の奮闘に同情し共鳴し、幾分冷静な龍溪の政治的寓意の如きは、省思する余裕をもたなかったのであろう。或る人々は、よしこれに多少気づいたにしても、この小説が時代ちがいの傑作である以上に、著者龍溪の造詣の博大なのに圧倒され気味で、(中略)いずれにしても、吾等は、ここにも亦、龍溪の文学的才分卓抜なのを認める。(中略)支那小説の愛読から学んだところの、照応・付線・波瀾・抑揚などという語辞で表

<sup>1</sup> 柳田泉「『経国美談』とその政治理想」、『政治小説研究・上』（春秋社、1967年）、206頁。

<sup>2</sup> 徳富蘆花『思出の記』上（岩波書店、1969年）、119-120頁。

<sup>3</sup> 1886年9月13・14日付『絵入自由新聞』526・527号。この新聞は『経国美談』の作者が日本人だと信じられなくて、西洋の原書をそのまま翻訳したのでもない、これほどの名作が出るわけがないという意味を公言した。

<sup>4</sup> 藪禎子「『経国美談』論」（『国語国文研究』第65号）、9頁。

わさされている記述のテクニクが、類を尽くして用いられ、(中略)却って謂う如き古典的な美を生む。この一点では、明治の歴史小説で『経国美談』を凌ぐようなものは、ほとんどあるまい。

と著者も含めて『経国美談』を非常に高く評価した。ほかにも、小栗又一は「この書の前編がたび世に現れるや、全国に非常なるセンセーションを巻き起こした、当時苟くも将来に望みを抱く青年にして『経国美談』を読まぬ者は殆どないと言われたが、全国の青年に、如何に大きな激動を与えたかは、幾十版といふその頃として未曾有の版数を重ねた一事に徴しても推して知るべきである。」<sup>5</sup>と『経国美談』がいかに飛ぶように売れたのかを説いた。

## 2 『経国美談』の中国における訳本

先行研究を眺めてみると、『経国美談』の漢訳版の単行本は4種類<sup>6</sup>と5種類<sup>7</sup>という2つの説がある。まずは4種類の場合では、周達訳の1907(明治40)年広智書局刊本と雨塵子訳本、1902(明治35)年上海商務印書館線装二冊本及び平装一冊本である。ただ、中村忠行によれば<sup>8</sup>、雨塵子は周達の筆名であり、山田敬三によれば<sup>9</sup>、商務印書館線装二冊本と平装一冊本の内容は同一だと考えられる。次に5種類の場合では、1902(明治35)年の線装二冊本、訳者不詳；1907(明治40)年広智書局刊本、周達訳述、捫風談虎客(即ち韓文挙)評本；出版社、出版地、訳者署名一切ない版本；出版社、出版地がないが、署名は「雨塵子」訳本；出版社、出版地、訳者署名がないが、『経国美談』と題名しての全編一冊版本である。いずれも、単行本は1900(明治33)年に『清議報』誌上に連載されてから出版されたものであり、『清議報』誌上の『経国美談』は『経国美談』の訳本を探求する糸口だと考えられる。

『清議報』の創刊地は当時華人の集中地の横浜であった。梁啓超らは横浜を拠点にして、近代政治思想の宣伝と導入に取り込み、その最初の舞台は『清議報』であった。その発行部数は「本報ハ創設以来僅カニ数月而シテ発兌数毎回四千余冊ニ達ス」<sup>10</sup>とされ、発売所は東京・横浜・大阪・神戸などの日本国内と、北京・天津・上海・福州・黒龍江などの中国大陸だけではなく、香港・朝鮮・澳門・シンガポール・サンフランシスコ・ホノルルなどを含めて、華僑社会を中心に内外の三十ほどの所で発行されたとされる<sup>11</sup>。

<sup>5</sup> 小栗又一『龍溪矢野文雄君伝』(大空社、1993年)217頁。

<sup>6</sup> 阿英(钱杏邨)『晚清戯曲小説目』(上海文芸聯合出版社、1954年)、165頁。

<sup>7</sup> 邹振環『『経国美談』の漢訳と清末民初における影響』(『東方翻訳』、2013年)43頁。

<sup>8</sup> 中村忠行「晚清における虚無党小説」(『天理大学学報』第85輯)、149頁。

<sup>9</sup> 山田敬三「『清議報』誌上の漢訳『経国美談』—中国政治小説研究札記」(『文化学年報』第3号)、202頁。

<sup>10</sup> 『清議報』第13冊、「記事拡張ト広告募集」。

<sup>11</sup> 前掲、山田敬三「『清議報』誌上の漢訳『経国美談』—中国政治小説研究札記」、200頁。

『清議報』は旬刊であって、月に三冊を刊行された。初刊は1898(明治31)年12月23日で、最後の刊行は1901(明治34)年12月21日の第100冊である。『清議報』の内容は「変法」のための政論からはじまり、国内外の時事問題、学説の紹介・翻訳・寄稿・詩文・随筆など幅広い内容を取り扱った。漢訳『経国美談』を連載する前には、東海散士の『佳人ノ奇遇』の漢訳版『佳人奇遇』と題して創刊号以来ほぼ毎号掲載された。『経国美談』は1900(明治33)年2月20日発行の第36冊から、1900(明治33)年7月11日の第51冊にわたって前篇20回が掲載された。1900(明治33)年8月15日の第54冊から後篇も連載されたが、1901(明治34)年1月11日の第19回にわたって連載は終了した。最後に刊行された第100冊には、「政治小説佳人奇遇経国美談合刻」と題した広告に「今特将全書合刻、用洋装精式釘装成帙、尽本年内出書」が掲載された。しかし、1901(明治34)年の刊行本が存在していないようであり、合刻本の出版は恐らく1902(明治35)年に入ってからである。前述した1902(明治36)年上海商務印書館線装二冊本あるいは平装一冊本はこれに相当するのではないかと今までまだ判明してない状況である。

もう一つの未判明の問題は訳者である。『清議報』誌上の漢訳『経国美談』には、訳者名は記載されていないため、誰が翻訳したのかについては確定されていない。まず、阿英(1900-1977、小説家・劇作家・文芸評論家)によれば、周達であるとされ<sup>12</sup>、馮自由氏によれば、周宏業であるという<sup>13</sup>。後の王曉平氏もこの説に従った。また、馬祖毅によれば、梁啓超である<sup>14</sup>。最新の研究として、鄒振環氏が2013年に発表された『『経国美談』の漢訳と清末民初における影響』において、「現在すでに該当訳本の漢訳者が維新派の人物である周宏業と判明できる紛れもない資料があった」と指摘した。

『清議報』誌上の漢訳『経国美談』は決して原作の忠実な翻訳ではないことは知られている。漢訳と原作の回数が同じで20回だが、内容が調整されている。その主な調整方法は次のようなものである。まず、原文のストーリーの主筋を基本的に変えず、後回の内容を取って前回に置いたり、前回の内容を取って後回に置いたり、章回と章回の間を切り目を変更したりする方法や、部分的に補充説明や付加事項を加えた方法である。このため、文字上のリフォームも避けられない。例えば、原作の第二回の「希腊列国ノ形勢」はギリシア列国の情勢と齊武国内の危機という背景紹介だけだが、漢訳は第三部分の巴比陀と威波能との国政に関する議論と巴比陀と居宅主人との家事に関する談話の内容を第二回に帰属させた。漢訳の第二回の題目もそれに応じて「二強国日就衰頹、両英雄密商国事」に変えた。原作のタイトルには5箇所の単句があったが、漢訳の単行本には、すべて対句となるように工夫していた。また、漢訳は懸念を設置したりしたことで、全体的にストーリーは原作より面白く感じる。さらに、漢訳は原作に出てきた近代から

<sup>12</sup> 前掲、阿英(钱杏邨)『晚清戯曲小説目』、165頁

<sup>13</sup> 馮自由「興中会時期之革命同志」(『革命逸史』第三集)、148頁。

<sup>14</sup> 馬祖毅『中国翻訳簡史』(中国对外翻訳出版社、1984年)、288頁。

あった新しい単語に補充説明を加えた。例えば第二回の原作と漢訳を見てみよう。

阿善ノ政体ハ 年久シキ共和政治ニシテ 其ノ行政部ニハ人民ノ公撰セル九名ノ行政官アリ…(中略)…又斯波多ノ政体ハ 立憲王政ニシテ 其ノ行政部ニハ 二人ノ国王アリ(原作)

阿善的は百姓作主的政体 那行政部有九個行政官…(中略)…這們様子叫作共和政体…(中略)…這們斯波多不同 占来是人君作主 百姓也可參議的政体 那行政部有兩個国主…(中略)…這們様子叫作立憲政体(漢訳)

これは阿善と斯波多の政治形式である「共和政体」と「立憲政治」について説明しているところである。その傍点から訳者の配慮がうかがえる。若杉邦子氏によれば、これは原作と漢訳版の読者の知識量の違いによるものであるという<sup>15</sup>。つまり、原作が仮定していた読者層は明治の自由民権運動に奔走する青年達であった。民権青年達は作品における政治用語は説明しなくても当然理解できるわけである。漢訳版の読者層は『清議報』の読者達であり、ハイレベルの知識を有する中国人の士大夫達であったが、「近代政治」に関することになることになると、それらの知識は少なかったのである。即ち、政治知識に乏しい清末中国の士大夫を対象とされている。彼らの「近代政治」入門のために、漢訳版『経国美談』は補充説明を取り上げたのである<sup>16</sup>。

また、第二の調整方法は、原作の本意を離れた翻案に近い翻訳である。例えば、有名な「春の歌」を対照してみよう。

#### 春の歌

見渡セハ 野ノ末 山ノ端マデモ 花ナキ里ソナカリケル 今ヲ盛りニ咲キ揃フ 色香愛  
タキ其花モ 過キ越シ方ヲ尋ヌレバ 憂キコトノミゾ多カリキ 霜降ル朝ニハ葉ヲ損シ 雪  
降ル夜ニハ枝ヲ折り 枯レントマデニ眺メラレ 集リ會フ憂キコトノ 積リ積リシ其中ヲ  
耐ヘ忍ビシ甲斐アリテ 長閑キ春ニ巡リ逢ヒ スク咲キ出ルゾ愛タケレ 世ノ為ニトテ誓ヒ  
テシ 其ノ身ノ上ニ喜ノ 花ノ蒼ハ憂キ事ト 知りナバ何カ憾ムベキ 春ノ花コソ例ナレ  
春ノ花コソ愛タケレ

#### 短剣行

<sup>15</sup> 若杉邦子「『経国美談』論——一政治小説の“伝播”に伴う変容について」(『文化学年報』3号)、52頁。

<sup>16</sup> 同上。

我有短劍嗚兮以斬佞臣 丈夫生世兮以救兆民 功耀日星兮氣 凌雲 震天地兮驚鬼神 是男兒之本分兮是豪傑之偉勳 又何畏乎患難 又何苦乎艱辛 君不見 世界之擾擾悉豪傑之風雲

原文の「温和」の格調と漢訳文の「短劍」、「患難」、「風雲」の雰囲気とは全く互換性がない。ほかにも例が多いが、矢野龍溪が描いた『経国美談』の「知的」且つ「優美」な主人公である巴比陀のイメージは彼が歌った「春ノ歌」の格調とは一致である。しかし漢訳版になると、巴比陀の造型は風雲と苦難を抵抗している英雄像になる。その原因について若杉氏によると、漢訳版の訳者が「英雄像」を描き出すために工夫したのは、清末の「時勢造英雄」<sup>17</sup>論にあるからであるという。つまり、漢訳者は清末に望ましい英雄のイメージを作品に反映させることによって、『経国美談』は課される人々を教育する義務も実現せられた<sup>18</sup>。

さて、漢訳『経国美談』は中国でどの程度受け入れられたのだろうか。そのことについて、1903（明治36）年3月発刊の『新民叢報』第28号の『学界時評』に以下のような文章がある。

今 新小説界中。若黒奴吁天録。若新民報之十五小豪傑。吾可以百口保其必銷。経国美談次之。然龍溪固小説家之雄。如所撰浮城物語者。得詞章家以訳之。必有偉觀。

『学界時評』は『経国美談』を『黒奴吁天録』<sup>19</sup>と『十五小豪傑』<sup>20</sup>のように位置づけたが、『小説考証続編拾遺』の中で蔣瑞藻は、

経国美談。述希腊英雄復国事。能使読者精神振作。誠為佳作。訳者全用平語。明白曉調。尤為得體。…(中略)…経国美談。訳出最早。体例文字皆佳。而名反不彰。不可解也。十五少豪傑。亦可與経国美談並稱。

と漢訳『経国美談』とその文体を含めて高く評価した。

漢訳『経国美談』は評価されたほかに、それを読んだ読者として、近代新作家梁啓超・李伯元・邱菽園の名があげられる。また漢訳『経国美談』は当時新文学と密接している胡適・周作人・郭

<sup>17</sup> 清末中国は列強の侵略によって、「武」を求めるようになった。『経国美談』の出版する直前に、梁啓超の唱えもあって、「英雄論」は流行していた。

<sup>18</sup> 前掲、若杉邦子「『経国美談』論——一政治小説の“伝播”に伴う変容について」、48頁。

<sup>19</sup> 林琴南訳『黒奴吁天録』（上海文明書局、1901年）。原本はストウ夫人の『アンクルトムズ・ケビン』である。

<sup>20</sup> ジュウール・ベルネの“Deux ans de vacances”を、森田思軒が英訳から重訳して『十五少年』としたものを底本に、梁啓超と羅普が漢訳して『新民叢報』誌上に連載したものである。

沫若・李健吾などの人達に深い影響を与え、新文学作家に大切な思想資源と創作インスピレーションを提供した<sup>21</sup>。例えば、梁啓超が1902(明治35)年に出版した『新中国未来記』は、漢訳『経国美談』の影響を受けた跡が明らかである<sup>22</sup>。『新中国未来記』創作前、梁啓超は『経国美談』と『佳人之奇遇』を二回に渡って推奨したのである<sup>23</sup>。

漢訳『経国美談』の受容のもう一つの側面は、改良京劇版本『新編前本経国美談新劇』の作成である。『新編前本経国美談新劇』の内容は漢訳『経国美談』に準じたものであり、ストーリー構成はほぼ漢訳版と一致している。ただ、先ほど言及した政治の基礎知識の補充説明については、削除されている。若杉氏はその理由について、『新劇』の読者は既に漢訳版を読み、そうした知識を会得している人々からだとしている<sup>24</sup>。『新劇』は最初に、李伯元が経営した小報の『世界繁華報』や『遊戯報』などに掲載されたが<sup>25</sup>、知名度が低かった。商務印書館の主編になったことを契機にして人気小説家になった李伯元は1903(明治36)年に小説雑誌『繡像小説』を創刊し、その創刊号に『新劇』を掲載した。その後、1904(明治37)年8月15日の第18号まで<sup>26</sup>掲載されたが、未完のまま幕切れを迎えた<sup>27</sup>。

### 3 『経国美談』の韓国における訳本

『経国美談』は朝鮮語にも翻訳された。20世紀初頭が朝鮮の文明開化の時期であり、日本や中国の作品、あるいは日本や中国を通して入ってきた欧米を中心とする各国の作品が翻訳されて紹介されている。『経国美談』もその中に含まれている。朝鮮語訳『経国美談』は新聞版と単行本版2種類ある。ここでは、布袋敏博氏の研究<sup>28</sup>をもとに、この2種類の概略を示したい。

新聞版は1904(明治37)年10月4日から『漢城新報』の誌面上で連載された4日、6日、7日で第一回を連載し、8日、9日で第二回、11日、12日、14日、15日、16日5回で第三回、21日、22日、28日、29日、11月1日の5回で第4回、11月2日の第五回が連載された。現存している『漢城新報』が1904(明治37)年11月6日の第1544号までであり、その後の資料がないため、11月6日以降に、朝鮮語『経国美談』の連載がされていたかどうかは不明である。この時点で連載された朝鮮語訳『経国美談』は日本語原作と中国語訳のどちらを手本にしたかと

<sup>21</sup> 前掲、鄧振環『『経国美談』の漢訳と清末民初における影響』、51頁。

<sup>22</sup> 寇振鋒「『新中国未来記』における「志人」と「佳人」——『経国美談』『佳人之奇遇』からの受容を中心に」(『多元文化』4)、43-56頁。

<sup>23</sup> 『清議報』第26冊と『清議報』第100冊である。

<sup>24</sup> 前掲、若杉邦子「『経国美談』論——一政治小説の“伝播”に伴う変容について」、54頁。

<sup>25</sup> 魏紹昌『李伯元研究資料』(上海古籍出版社、1980年)、319頁。

<sup>26</sup> 漢訳版『経国美談』の第18回に相当するところまでである。

<sup>27</sup> 前掲、若杉邦子「『経国美談』論——一政治小説の“伝播”に伴う変容について」、43頁。

<sup>28</sup> 布袋敏博「二つの朝鮮語訳『経国美談』について」(『近代朝鮮文学における日本との関連相』、1995-1997年度科学研究費補助金(基盤研究B)成果報告書)。

考えると、日本語原作と非常に類似性があり、『清議報』とは一致しないと見られる。また、その時、『漢城新報』掲載版の『経国美談』は日露戦争の進展と合わせて、作品の斯波多を当時のロシアに見立てて、その脅威から国を守るために、朝鮮は日本と手をむすび、日本指導を抑ぐことを求める意図をもって、日本人主導のもとに訳載されたものであったといえる。

一方、単行本版は1908(明治41)年4月玄公廉によって翻訳され、右文館により出版された。序の中で、前編は20回、後編は22回という形で編集された。これまでの先行研究によると、玄公廉訳の『経国美談』は中国語をテキストとしているということが確認できた<sup>29</sup>。だが、完全に漢訳版の『経国美談』に準拠したのではなく、章回数の違いや切り目の違いが見られる。『漢城新報』掲載版の意図に対して、1908(明治41)年単行本として出版された朝鮮語訳『経国美談』は、日本の保護国となっていた自国の国権回復・救国運動に挺身していた玄公廉が、斯波多を日本に見立てるといふ本文の読み替えを行い、日本の脅威を訴え、強くなった日本の朝鮮支配に抵抗し、自主独立を志向する朝鮮国民の意識を高めるために刊行したものであるといえる。

以上の各版本の『経国美談』を表にまとめると以下ようになる。

	作者	題目	出版社	出版時間	注釈
原作	矢野龍溪	『経国美談』	報知社	1883/3 1884/2	
漢訳連載	周遼? <sup>30</sup> 周宏業? <sup>31</sup> 梁啓超? <sup>32</sup>	『経国美談』	『清議報』 (横浜)	1900	未完
漢訳単行本一		『経国美談』	上海商務印書館	1902	線装二冊 本
漢訳単行本二		『経国美談』			
漢訳単行本三	周遼訳述 韓文挙評本		上海広智書局	1907	
漢訳単行本四	雨塵子 <sup>33</sup>	『経国美談』			

<sup>29</sup> 前掲、布袋敏博「二つの朝鮮語訳『経国美談』について」、53頁。

<sup>30</sup> 阿英の推定である。『晚清戯曲小説目』(上海文芸聯合社、1954年)、165頁。

<sup>31</sup> 前掲、馮自由「興中会時期之革命同志」、148頁。また、三田氏の推定によれば、周遼は周宏業の筆名である。山田敬三「『清議報』誌上の漢訳『経国美談』——中国政治小説研究札記」(『文化学年報』第3号)、202頁。

<sup>32</sup> 馬祖毅と蔣英豪の推定である。邹振環『『経国美談』の漢訳と清末民初における影響』(『東方翻訳』5)、46頁に詳しい。

<sup>33</sup> 中村忠行によれば、雨塵子は周遼の筆名である。『晚清における虚無党小説』(『天理大学学報』

漢訳単行本五		『経国美譚』			全編一冊 本
改良京劇版	李伯元	『新編前本経国美談新劇』	『繡像小説』第 1号-34号	1903/5 /1- 1904/8/15	前篇
朝鮮語訳 1		『経国美談』	『漢城新報』	1904/10/4 - 1904/11/2	
朝鮮語 2	玄公廉	『経国美談』	右文館	1908/4	

### おわりに

前述したように、中日韓の間に、『経国美談』は時勢の相違によって、自己目的の持っている8個の訳本が生み出された。時勢の違いに応じて自由に変容を遂げた訳本は、漢字文化圏を依存したものでもあり、依存されたものでもあると考えられる。日本人の書いた『経国美談』は100年前に漢字文化圏内の文化交流の促進に力を入れたと考えられる。

また、『経国美談』は1900(明治33)に『清議報』に連載されることを皮切りに、いろんな単行本が出版された。訳本は中国の当時の社会現状と読者層に応じて添削と置換があるが、自由民権の中心思想が変わらなかった。中国で広く読まれた『経国美談』の文体は中国文学の影響を受けた跡が明らかである。例えば、章節の布置は中国章回小説の形をとり、「章」ではなくて「回」を使われ、毎回が「回目」<sup>34</sup>を設置されたのである。また、「漢文体」・「和文体」・「欧文直訳体」・「俗語俚語体」四体を合併して運用され、それぞれの特徴としては、典雅悲壮・優柔温和・緻密精雅・滑稽曲折が挙げられる。この考え方はこの後矢野龍溪が出版した「日本文体文字新論」創作の基礎となった。この点については、今後の課題として研究を行いたい。

### 参考文献

- 垣田純郎『人物管見』(民友社、1893年)  
 魏紹昌『李伯元研究資料』(上海古籍出版社、1980年)  
 馬祖毅『中国翻訳簡史』(中国对外翻訳出版社、1984年)  
 林琴南訳『黒奴吁天録』(上海文明書局、1901年)  
 钱杏邨『晚清戯曲小説目』(上海文芸聯合社、1954年)  
 越智治雄編『論集「文学史」第一輯・近代文学の検討』(白帝社、1962年)

85)、149頁。

<sup>34</sup> 中国古代章回小説は基本的に全部「回目」を設置する。つまり毎回の題目であり、単文であったり、対照された対句であったりする形がある。小説創作における中国独特の芸術表現形式だと思われる。

- 大久保利謙『山路愛山集』(築摩書房、1965年)  
紀田順一朗『明治の理想——反動ナショナリズムのシンボル』(三一書房、1965年)  
越智治雄編『明治文学全集15・矢野龍溪集』(築摩書房、1966年)  
徳富蘆花『思出の記』上(岩波書店、1969年)  
越智治雄編『日本近代文学大系2・明治政治小説集』(角川書店、1974年)  
矢野龍溪『経国美談』(岩波書店、1975年)  
米田貞一『矢野龍溪』(大分県教育委員会、1977年)  
復旦大学編『中国近代史』第3巻(三省堂、1981年)  
加藤周一・前田愛『日本近代思想大系・文体』(岩波書店、1989年)  
小栗又一『龍溪矢野文雄君伝』(大空社、1993年)
- 野田秋生『矢野龍溪』(大分県教育委員会、1999年)  
尾崎行雄「踏晦したる矢野文雄氏」(『痴游雑誌』第2巻6号、1936年6月)  
柳田泉「『経国美談』とその政治理想」(『政治小説研究・上』、1967年)  
山内武麒「龍溪矢野文雄先生」1-10(佐伯史談会、1973年)  
中村忠行「晩清における虚無党小説」(『天理大学学報』第85輯、1973年3月)  
小川武敏「『経国美談』の構造——想実論の前段階として」(『文芸研究』第41号、1979年3月)  
藪禎子「『経国美談』論」(『国語国文研究』第65号、1981年2月)  
山田敬三「『清議報』誌上の漢訳『経国美談』——中国政治小説研究札記」(『文化学年報』第3号、1984年3月)  
井田輝敏「矢野龍溪」(『近代日本のジャーナリスト』御茶ノ水書房、1987年)。  
若杉邦子「『経国美談』論——一政治小説の“伝播”に伴う変容について」(『九州中国学会報』第31巻、1993年5月)  
布袋敏博「二つの朝鮮語訳『経国美談』について」(『近代朝鮮文学における日本との関連様相』、1998年)。  
寇振鋒「『新中国未来記』における「志人」と「佳人」——『経国美談』『佳人之奇遇』からの受容を中心に」(『多元文化』4、2004年3月)。  
鄒振環「『経国美談』の漢訳と清末民初における影響」(『東方翻訳』、2013年)
- 『清議報』(復刻版・1970年、中華書局)  
『郵便報知新聞』(復刻版・1989-1993、柏書房)  
『絵入自由新聞』(マイクロ・フィルム)